松島湾における縄文時代晩期の遺跡動態

小林圭一

1　はじめに

宮城県沿岸部のほぼ中央に位置する特別名勝「松島」（1952 年指定）は、200 余の島々が点在する多島海で、日本三景の一つに数えられている。松島湾は元々陸地であったが、現在の地形は最終氷期以降陸地が相対的に沈降した結果生じた沈水地形で、海水準の上昇がピークを迎えた縄文時代前期以降は、凝灰岩等の軟弱な岩質から波浪浸食や風化作用を受け、次第に景観を変容させたものの、海岸線の変動の幅は小さかったと考えられている。

内海で波が穏やかな松島湾沿岸の丘陵から汀線付近にかけて、縄文時代の貝塚が数多く分布しており、国内屈指の貝塚密集地帯を形成している。筆者の集計では早期から晩期まで 64 ヶ所の貝塚[註1]を数えるが、その中には国史跡に指定された里浜貝塚（東松島市）や西の浜貝塚（松島町）、大木囲貝塚（七ヶ浜町）、また学史上名高い室浜貝塚（東松島市）や船入島貝塚（塩竈市）、福浦島貝塚（松島町）、桝形囲貝塚（多賀城市）等が含まれ、大正期より松本彦七郎、長谷部言人、山内清男、斎藤忠、角田文衛等の気鋭の研究者による発掘調査が試みられてきた。そのため縄文・弥生土器の編年表に型式名を冠した遺跡が多く存し、また層位的発掘調査や貝層の悉皆採集といった先駆的な調査方法が導入されるなど、当該域の遺跡が考古学研究の発展に重要な役割を果たしたとの評価に、疑問の余地はないであろう。

嘗て筆者は、亀ヶ岡文化期の遺跡分布を検討した中で、松島湾の様相にも論及した（小林 2008）。該域では湾口部の里浜貝塚と二月田貝塚（七ヶ浜町）、湾央部の西の浜貝塚の三つの拠点集落が並存し、これ等を核として生業活動が営まれた一方で、内湾や外洋を舞台に協同作業が行われた可能性、また晩期後半に汀線付近に小規模製塩遺跡が急増しており、海水準の変化に連動した遺跡立地の変化と土器製塩の活発化を指摘した。しかし当時の筆者の力量から説得性を持った図版の提示がかなわず、十分意を尽くすことが出来なかった。本稿では新たに作成した松島湾周辺の地形分類図と最新版（2016 年度版）の宮城県遺跡地名表をもとに、前稿の内容を深化させ、亀ヶ岡文化期における地域社会の理解を進展させることを企図している。

2　松島湾の縄文遺跡と海岸線の変化

（1）松島湾の概要

広義の仙台湾は、東北中部の太平洋に面した牡鹿半島（宮城県石巻市）から鵜の尾岬（福島県相馬市）に至る湾口部約 68 ㎞、海岸線約 130 ㎞の海域で、石巻湾、松島湾、仙台湾（狭義）の三つの支湾から構成される（図１）。湾岸は平滑な砂丘海岸が主体であるが、中央の松島湾だけが入り海で、丘陵端が海面に突き出した複雑な地形をなしている。

仙台湾の核心域である松島湾は、なだらかな丘陵（松島丘陵）に囲まれた東西約 10 ㎞、南北約８㎞の小湾で、湾内外には大小 200 余の島々が点在する（図２）。島々の海抜高度は 10 ～ 30 ｍで、湾内最大の宮戸島、寒風沢島、野々島、桂島、馬放島が北東－南西に並列し、七ヶ浜半島と共に障壁となって外洋と内湾を区切っており、内湾には福浦島、焼島、九ノ島等の小島、また外洋には船入島、唐戸島等の小島が点在する。湾内に流入する河川はいずれも小河川で、湾央の高城川が流路延長 12 ㎞で最大となっている。従って湾内へ排出される土砂の量は少なく、湾岸に発達した沖積平野の規模も小さい。また外洋部とは湾口の島々で遮断されるため、湾内の波は穏やかで、水深も航路として浚渫された部分を除くと４ｍ以浅となっている[註2]。湾内外の潮の出入りは、湾口の列島状の島嶼間の狭い水道を通じて行われているが、現在は陸繋砂州（トンボロ）となっている宮戸島と鳴瀬川河口間も、嘗ては開口して海水の浸入経路となっていた。なお松島湾沿岸の現在の行政区画は、湾央の松島町を中心に、東側が東松島市、西側が利府町と塩竈市、

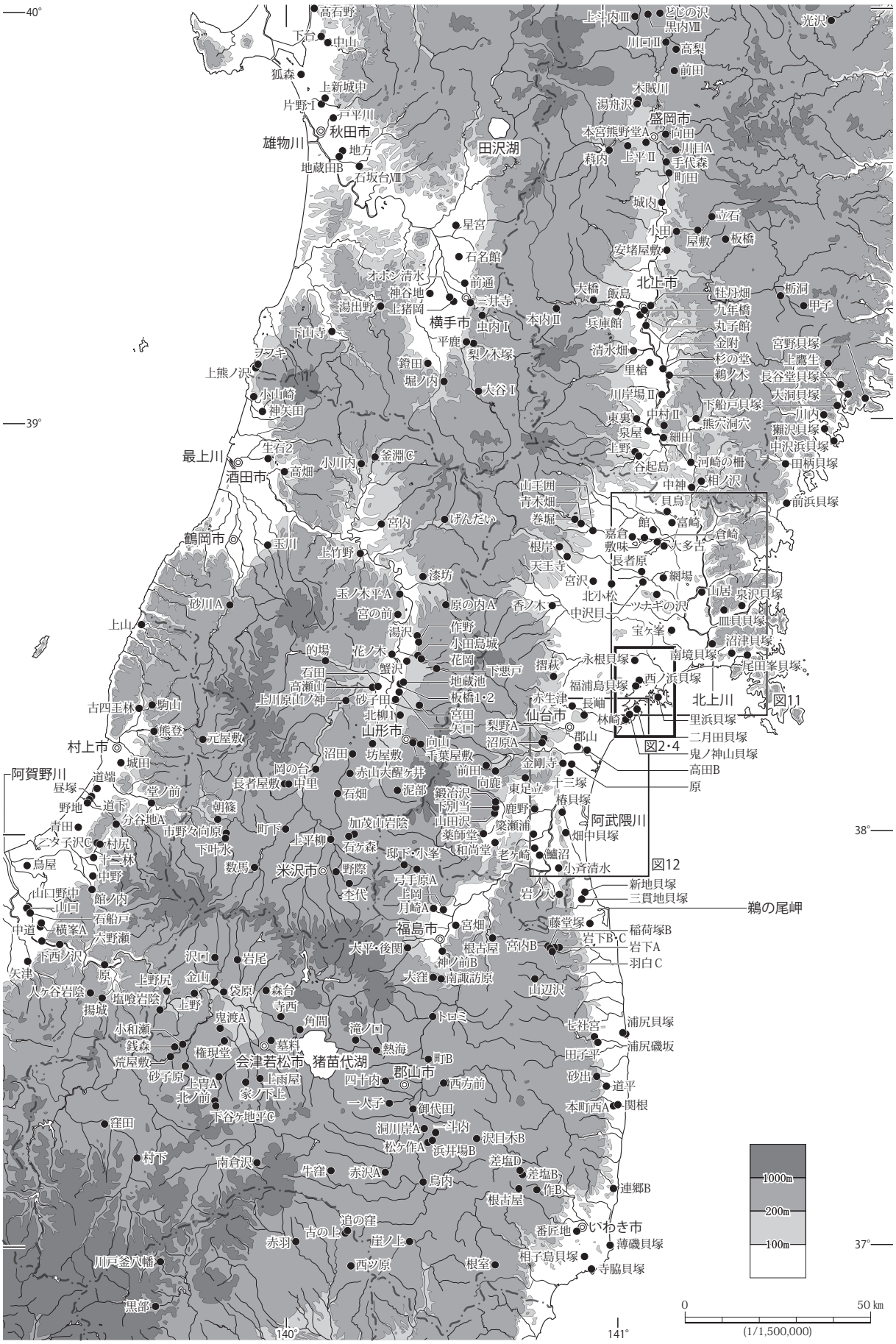


図１　東北中部・南部における縄文時代晩期（後期後葉～弥生前期）の主要遺跡

図２　松島湾の地形分類と縄文時代の遺跡分布（1/100,000）

表 1　松島湾及びその周辺の縄文時代遺跡

No.	遺跡名	所在地	立地	時期
1	二月田(空墓)貝塚	七ヶ浜町	丘陵・丘陵麓	後・晩・弥生・古代
2	沢尻貝塚	七ヶ浜町	海岸	晩期・弥生・平安
3	沢上貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	晩期
4	峯貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	晩期・古代
5	吉田浜貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	早期
6	藤ヶ沢貝塚	七ヶ浜町	丘陵斜面	前・中期
7	君ヶ岡貝塚	七ヶ浜町	丘陵斜面	前・中期
8	清水洞窟遺跡	七ヶ浜町	丘陵麓他	晩期・弥生・平安
9	清水貝塚	七ヶ浜町	丘陵斜面	後期・古墳・古代
10	水浜貝塚	七ヶ浜町	海岸	晩期・弥生・古代
11	東宮(鳳寿寺)貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	後・晩・弥生・平安
12	小畑貝塚	七ヶ浜町	丘陵	晩期・弥生・古代
13	左道遺跡	七ヶ浜町	丘陵	前期・古代
14	大木囲貝塚	七ヶ浜町	丘陵	前期～後期
15	阿川沼貝塚	七ヶ浜町	海岸	晩期・弥生
16	林崎貝塚	七ヶ浜町	丘陵端部他	晩期・弥生
17	野山(鬼ノ神山)貝塚	七ヶ浜町	丘陵斜面	晩期・弥生・奈良
18	野山遺跡	七ヶ浜町	丘陵斜面	晩期・弥生
19	笹山貝塚	七ヶ浜町	丘陵斜面	晩期・弥生
20	諏訪神社前遺跡	七ヶ浜町	丘陵麓	晩期・古代
21	長須賀遺跡	七ヶ浜町	浜堤	縄文・古墳後・平安
22	橋本囲(大代)貝塚	多賀城市	丘陵麓	晩期・弥生
23	大代洞窟遺跡	多賀城市	海蝕崖	縄文・中世
24	大代遺跡	多賀城市	丘陵麓	晩期・古代
25	柏木遺跡	多賀城市	丘陵斜面	縄文・古代
26	塩竈神社境内遺跡	塩竈市	丘陵斜面	晩期
27	一本松貝塚	塩竈市	海岸	晩期・平安
28	崎山囲洞窟遺跡	塩竈市	海蝕崖	晩期・弥生・古墳中
29	新浜B貝塚	塩竈市	海岸	晩期・弥生・奈良・平安
30	内裡島A貝塚	塩竈市	海岸	縄文・弥生・平安
31	桂島貝塚	塩竈市	丘陵斜面	前・中期・平安
32	野々島貝塚	塩竈市	海岸	早期・奈良・平安
33	薬ヶ崎貝塚	塩竈市	海岸	晩期・奈良・平安
34	浦戸貝塚	塩竈市	海岸	中期・平安
35	船入島貝塚	塩竈市	島嶼	早・前・中期・平安
36	伊保石公園遺跡	塩竈市	丘陵	縄文・古代
37	浜田洞窟遺跡	利府町	岬	晩期・弥生・古代
38	須賀A遺跡	利府町	丘陵	縄文・古代
39	須賀B遺跡	利府町	丘陵	縄文
40	硯沢窯跡	利府町	丘陵斜面	縄文・奈良・平安
41	大貝A窯跡	利府町	丘陵麓	縄文・平安・中世
42	丹波沢A遺跡	利府町	丘陵	縄文
43	西の浜貝塚	松島町	丘陵麓	前～晩・弥・古墳・平安
44	鷲島貝塚	松島町	丘陵	前・晩・弥生
45	帰命院下貝塚	松島町	丘陵麓	晩期
46	道珍浜貝塚	松島町	丘陵麓	前・中期
47	新富山貝塚	松島町	丘陵麓	早期
48	三十刈遺跡	松島町	丘陵麓	中・後期
49	観音堂裏遺跡	松島町	丘陵斜面	中期
50	通河崎貝塚	松島町	丘陵	縄文
51	福浦島貝塚	松島町	島嶼	前・晩・弥生・平安
52	引通島貝塚	松島町	島嶼	晩期
53	焼島貝塚	松島町	島嶼	中・晩・弥生・古代
54	九ノ島貝塚	松島町	島嶼	晩期・弥生・古代
55	館ヶ崎貝塚	松島町	沖積平野	晩期・弥生・古代
56	元手樽遺跡	松島町	丘陵麓	晩期・古代
57	釜沢遺跡	松島町	丘陵麓	縄文・弥生・古代
58	銭神下貝塚	松島町	丘陵麓	晩期・古代
59	大浜貝塚	松島町	沖積平野	縄文・古代
60	大浜B遺跡	松島町	丘陵	縄文・弥生・古代
61	大蓬沢遺跡	松島町	丘陵麓	縄文・古代
62	梅ヶ沢貝塚	松島町	丘陵麓	前・中期・古代
63	梅ヶ沢B貝塚	松島町	海岸	晩期・弥生・古代
64	名込貝塚	松島町	丘陵麓	縄文・古代
65	六合沢B遺跡	松島町	海岸	晩期
66	古浦貝塚	松島町	丘陵麓	晩期・古代
67	古浦B遺跡	松島町	海岸	縄文・古代
68	古浦D遺跡	松島町	海岸	縄文・古代
69	永根(幡谷)貝塚	松島町	丘陵	前～後・弥生
70	西光院脇遺跡	松島町	丘陵	中・後期
71	貝殻塚貝塚	松島町	丘陵	前・中期
72	日当遺跡	松島町	丘陵斜面	縄文・古代
73	檀山B遺跡	松島町	丘陵斜面	縄文
74	大塚貝塚	東松島市	丘陵麓	縄文
75	野蒜亀岡貝塚	東松島市	浜堤	晩期
76	金山貝塚	東松島市	丘陵麓	早～中期・平安
77	潜ヶ浦A貝塚	東松島市	丘陵麓	晩期
78	清水貝塚	東松島市	丘陵麓	晩期
79	清水名遺跡	東松島市	丘陵麓	縄文
80	潜ヶ浦B貝塚	東松島市	丘陵斜面	前・中期
81	潜ヶ浦C貝塚	東松島市	丘陵斜面	晩期
82	室浜貝塚	東松島市	丘陵斜面	前～晩期
83	深田遺跡	東松島市	丘陵斜面	縄文
84	新道町遺跡	東松島市	丘陵斜面	縄文
85	里浜貝塚	東松島市	丘陵麓	前～晩・弥・古・奈・平安
86	倉崎浜貝塚	東松島市	海岸	晩期・平安
87	瀬戸浜B貝塚	東松島市	海岸	晩期・平安
88	大浜貝塚	東松島市	丘陵斜面	晩期・古代
89	大浜A遺跡	東松島市	丘陵斜面	縄文
90	月浜貝塚	東松島市	丘陵	縄文(繊維土器)
91	横山貝塚	東松島市	丘陵斜面	中期・古代
92	蛤浜製塩遺跡	東松島市	沖積平野	縄文・古代
93	飯塚貝塚	東松島市	丘陵麓	縄文
94	清水中田囲貝塚	東松島市	丘陵斜面	縄文・弥生・平安
95	山岸貝塚	東松島市	丘陵斜面	縄文?
96	大栗貝塚	東松島市	丘陵斜面	縄文?
97	上下堤遺跡	東松島市	丘陵斜面	縄文
98	荻窪遺跡	東松島市	丘陵斜面	縄文・奈良・平安・近世
99	内谷地遺跡	東松島市	丘陵斜面	縄文・古代
100	上下堤畑中貝塚	東松島市	丘陵麓	前・晩期・古代
101	川下響貝塚	東松島市	河川敷	前～晩期・古代
102	高松貝塚	東松島市	河川敷	早～晩・弥生
103	佐ノ下遺跡	東松島市	丘陵	縄文・古代
104	川子沢遺跡	東松島市	丘陵斜面	縄文・古代
105	熊前遺跡	東松島市	丘陵	縄文・古代
106	小僧田遺跡	東松島市	丘陵麓	中期
107	天神堂遺跡	東松島市	丘陵	縄文・古代
108	小分木貝塚	東松島市	丘陵斜面	前期
109	餅田貝塚	東松島市	丘陵麓	前期
110	平田原貝塚	東松島市	丘陵	前・中期
111	鳥屋場山遺跡	大郷町	丘陵斜面	中期
112	原遺跡	大郷町	丘陵	後期
113	大松沢貝塚	大郷町	丘陵斜面	中期
114	石竹貝塚	大崎市	丘陵斜面	前～後期

＊網点は貝塚を示す

南側が七ヶ浜町と多賀城市が該当する。

（2）松島湾周辺の縄文遺跡

図２は松島湾沿岸を中心とした東西 16 ㎞、南北 24 ㎞の範囲の地図で、行政区画では６市５町（松島町の全域と東松島市、利府町、塩竈市、多賀城市、七ヶ浜町、仙台市、大郷町、大崎市、美里町、石巻市の一部）が含まれ、鳴瀬川下流域や大崎平野縁辺に位置した遺跡も包摂する。同図には縄文時代の 114 遺跡をプロットしたが、遺跡数の内訳は早期が６遺跡、前期が 24 遺跡、中期が 27 遺跡、後期が 14 遺跡、晩期が 54 遺跡、弥生時代が 36 遺跡（表１・図７）で、後期に一旦減少するものの、早期が最も少なく、晩期が最多となっており、漸増傾向が指摘される。前記したように松島湾沿岸の貝塚は 64 遺跡を数えるが、その周辺を含めた図２には 78 遺跡をプロットした。

松島湾沿岸の貝塚は、湾口部と湾央部に集中しており、湾口北東部の「宮戸島遺跡群」と湾口南西部の「七ヶ浜遺跡群」、湾央の「松島遺跡群」の三つの支群から構成される。宮戸島遺跡群は里浜貝塚、七ヶ浜遺跡群は大木囲貝塚と二月田貝塚、松島遺跡群は西の浜貝塚が中核の遺跡となるが、これ等の支群は前期から晩期にかけ長期にわたって形成されていた。定着的な拠点集落とそれを取り巻く小規模な遺跡が、社会的機能を分有しながら相互の関係を維持していたと考えられる。

松島湾沿岸の最古の貝塚は、七ヶ浜半島の吉田浜貝塚（七ヶ浜町）である。同貝塚は外洋を臨む丘陵先端（標高 25 m）に位置し、アサリ主体の上層から貝殻条痕文系の土器、カキ主体の下層から貝殻圧痕文系の土器が出土した（後藤 1968）。当時松島湾はまだ形成の途上にあり、海岸線は遠方にあって前面に遠浅の海岸が展開していたと推定される（図３－Ｃ・Ｄ）。縄文海進がピークを迎え、現在の地形に近づいた前期は遺跡数が増加し、三つの遺跡群の鼎立状況が確立する。特に上川名Ⅱ式・大木１式期に遺跡が急増し、宮戸島遺跡群では里浜貝塚、七ヶ浜遺跡群では大木囲貝塚、松島遺跡群では道珍浜（どうちんはま）貝塚[註3]が中核となるが、それ以降の大木 2a ～６式期は遺跡数が減少し、ほぼ中核の遺跡に限定される。中期に入ると松島遺跡群で道珍浜貝塚から西の浜貝塚へ主体が移り、七ヶ浜遺跡群では後期前葉に大木囲貝塚から二月田貝塚に移っており、三つの貝塚の並立関係は後期中葉から弥生中期まで継続していた。

松島湾沿岸以外では、鳴瀬川西岸の河川敷に川下（かわくだり）響（ひびき）貝塚（東松島市）が位置している。同貝塚の詳細は定かでないが、前期（大木１～６式）、中期（大木７～10 式）、後期（南境～宝ヶ峯式）、晩期（大洞 BC ～ A’式）と長期間営まれており、対岸の高松貝塚（早～晩期）と共に縄文時代を通して有力な地域圏を形成していたと推定される。松島丘陵内にはその他に貝殻塚貝塚（大木１式）や永根貝塚（大木９～大洞 C2 式）が位置しており、大松沢（おおまつざわ）丘陵の南端には大松沢貝塚（大木 8a ～ 8b 式）と石竹貝塚（大木 8b ～南境式）、鳴瀬川の東側の旭山丘陵には前記した高松貝塚（東松島市）の他に、小（こ）分（ぶん）木貝塚（早・前期）、餅田（もちた）貝塚（早・前期）、平田原（ひだわら）貝塚（早～中期）が位置している。これ等はいずれも鹹水性の貝塚で、早期後葉から晩期まで海域が鳴瀬川を遡って大崎平野内まで広がっていた様相が確認出来る。

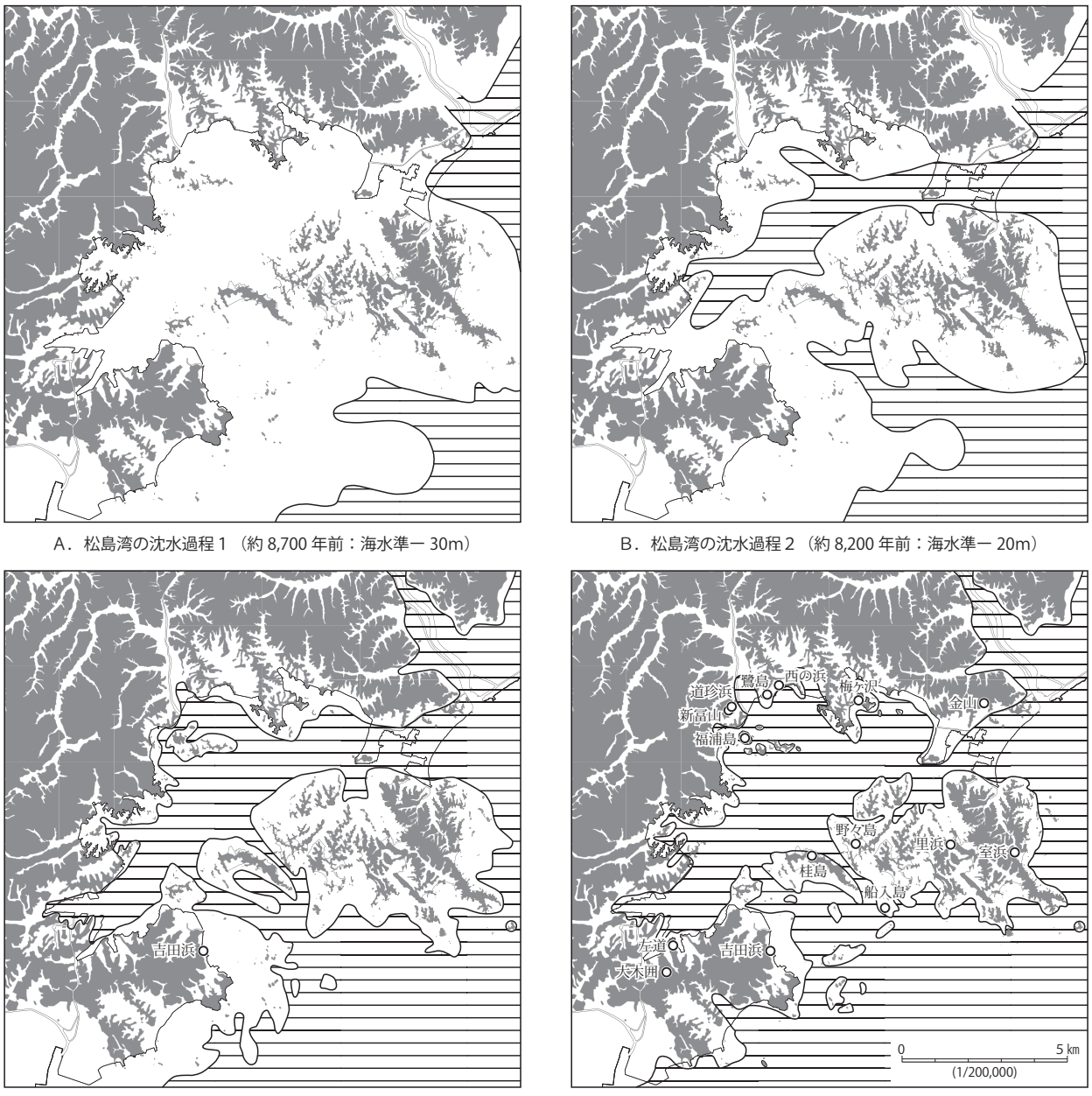
（3）松島湾の沈水過程

縄文早期の松島湾の沈水過程は、松本秀明氏によって復元されている（図３）。但し沈水過程初期における海水の進入経路には、宮戸島－野蒜間の陸繋砂州の地下（松本 1984a）と七ヶ浜半島東側（松本 1984b）の二案が提示されており、ボーリング調査による再検討の結果、前者（図３－Ｂ）の妥当性が指摘されている（松本 1988）。

最終氷期最盛期以降海面は上昇を続け、約 8,700 年前（^{14}Ｃ年代で未較正、以下同様）には現在の海水準に対し－ 30 mのレベルに達する（図３－Ａ）。当時の海岸線は現在の七ヶ浜半島東端から５～６㎞東に位置しており、現在湾外に見られる島々も全て地続きの状態であった。

約 8,200 年前になると海面は－ 20 mに達し、現在陸繋砂州となっている洲崎浜の部分から湾内への海進が開始されたと考えられる（図３－Ｂ）。また桂島の南側にも海水が浸入し、入り江が形成され、宮戸島付近と七ヶ浜半島の延長部がそれぞれ半島状に突き出していたと想定される。

約 7,500 年前になると海面は－ 10 mに達し、海岸線は急速に後退し、高城川の河口付近や塩釜港まで海域が拡大していった（図３－Ｃ）。野々島－桂島間と桂島－馬放島間の水道からも海水が浸入し、それまで地続きで



A．松島湾の沈水過程１（約 8,700 年前：海水準ー 30m）　B．松島湾の沈水過程２（約 8,200 年前：海水準ー 20m）

C．松島湾の沈水過程３（約 7,500 年前：海水準ー 10m）　D．松島湾の沈水過程４（約 6,700 年前：海水準ー５m）

図３　松島湾の沈水過程（松本 1984a）改変

あった島々は次第に分断され、宮戸島、寒風沢島、野々島からなる「古宮戸島」と、桂島を中心にその周辺の島々からなる「古桂島」が出現した。

その後も海水準の上昇が続き、約 6,700 年前には海面は－５mのレベルに達し、更に小さな島々に分断され、現在の地形に近づいた（図３－D）。海水準の上昇は約 5,000 年前まで継続した後、現在とほぼ同レベルに安定したと考えられている。

上記した年代は 1980 年までの古い測定値に基づいており、また文献により提示された年代が異なるため、土器型式編年との対応は困難である（註４）。海域が拡大した図３－Dを早期後葉～前期前葉の復元図と捉えて、当該期の 15 遺跡をプロットしたが、海底埋没貝塚として著名な先苅（まずかり）貝塚（愛知県南知多町）を例に出すまでもなく、松島湾周辺の海面下に埋没した、または消失した縄文早期の遺跡が数多く存したことが予想される。

仙台湾岸では 6,000 年前頃に縄文海進の高頂期を迎えたが、海水準は＋１m前後を大きく上回ることはなく、それ以降は下記の微変動が繰り返されたと指摘されている（松本 2000）。

① 5,000 ～ 4,000 年前：低下（－２m程度）

② 4,000 ～ 3,500 年前：上昇傾向

③ 3,500 ～ 2,800 年前：低下傾向
④ 2,800 ～ 2,000 年前：上昇傾向
⑤ 2,000 ～ 1,200 年前：低下傾向
⑥ 1,200 ～　現　在　：上昇傾向

縄文海進以降現在までの間では、３回の海水準の低下傾向が示されている。縄文晩期は③と④が該当しており、後期中葉から晩期前半にかけての海面の低下、晩期後半から弥生中期頃にかけて海面の上昇が生起したことになるであろう。前世紀に測定された未較正の放射性炭素年代に基づくため、今日一般化した高精度の AMS 法による較正年代との単純な対比は出来ないが、晩期中葉に海水準の転換期が存したと考えられる。松島湾では大洞 C2 式期に忽然と製塩遺跡が出現するが、いずれも汀線付近に展開しており、海水準の変化に連動していた可能性が推定される。なお同氏の別稿（松本 1999）では、弥生時代の海水準の転換期に当たる④と⑤の「2,000 年前」が、「2,200 年前」に変更されている。

3　松島湾の縄文晩期遺跡の様相

（1）晩期の遺跡分布

縄文晩期（後期後葉を含む）の松島湾沿岸には、50 遺跡が確認されている（図 4）。そのうち貝塚が 44 遺跡で、縄文時代を通して遺跡数は最大となる。これ等の遺跡は前記したように里浜貝塚を中核とした湾口北東部の「宮戸島遺跡群」、二月田貝塚を中核とした湾口南西部の「七ヶ浜遺跡群」、西の浜貝塚を中核とした湾央の「松島遺跡群」に区分される。図 4 はこれ等の貝塚を中心に半径 2.5 ㎞の円周を描出したが、三つの貝塚は湾内を介して 6.5 ～ 8 ㎞の三角の位置関係にある。

その他に、鳴瀬川沿いの川下響貝塚と高松貝塚、松島丘陵北部の旧品井沼に近い永根貝塚（松島町）が、比較的継続期間が長く有力遺跡となる。晩期の海水準は現在のレベルよりもやや低下しており、晩期後半には標高１～３ｍの汀線付近に立地した遺跡が濃密に分布し、一本松貝塚（塩竈市）のように汀線下で貝層（大洞Ａ式）が検出された例も存する。また鳴瀬川を遡った大崎平野の一部も当時海域であったと推定され（松本 2008）、干拓された旧品井沼付近は標高３ｍ以下の低地となる。川下響・高松貝塚の眼前の鳴瀬川が海水の水道として機能していたのであろう。

宮戸島遺跡群は里浜貝塚を中核として、縄文前期初頭から弥生中期の長期にわたり、地点を移しながら継続していた。同貝塚の詳細は後述するが、後期中葉から晩期初頭までは西貝塚（台囲地区）と北貝塚（寺下囲地区）の二つの地区が並存していたが、大洞Ｂ式以降は北貝塚に生活の主体が統合され、その周辺で土器製塩が活発化した。島内には里浜貝塚のほかに、東部に室浜貝塚（後期後葉～大洞Ｂ式）、北西部に潜ヶ浦（かつぎがうら）Ａ貝塚（大洞Ｃ1～Ａ式）、北部に清水貝塚（後期後葉～大洞Ｂ式）が知られているが、宮戸島以外の湾口の島嶼には晩期の遺跡が少なく、野々島の薬ヶ崎（くすりがさき）貝塚（塩竈市）のみとなる。

松島遺跡群は縄文中期後葉以降西の浜貝塚を中核とした領域が形成されたが、同貝塚がある高城川河口周辺とその東側の銭神（ぜにがみ）半島の周辺、南側の島嶼部の三つの地域に区分される。西の浜貝塚を除くといずれも晩期後半の製塩遺跡となっており、晩期前半は西の浜貝塚に集住した生活が営まれていたのであろう。西の浜貝塚（別称磯崎貝塚）は海岸に突き出た標高 15 ｍの丘陵から海岸部に形成された馬蹄形の貝塚で、その規模は東西 130 ｍ、南北 200 ｍを測り、アサリを主体とした主鹹貝塚である。貝層の形成が明確になるのは、これまでの調査所見から大木 10（新）式以降であるが、特に後期前葉（南境式）～晩期初頭（大洞Ｂ式）にかけて良好な堆積層が検出されている。また大洞Ａ式の埋葬人骨１体や弥生中期寺下囲式期の舟底形の製塩炉が検出されている。

七ヶ浜遺跡群は二月田貝塚を中核として、七ヶ浜半島から塩釜港にかけた地域を領域としたが、湾口を臨む七ヶ浜半島東側、湾内に面する半島北側、外洋に面した半島南側、また塩釜港付近の丘陵から低地に遺跡が点在する。晩期後半の製塩遺跡が多数を占め、晩期前半は沢上貝塚（大洞Ｂ式主体）や東宮貝塚（大洞Ｃ1 式以降主体）等に限られ、二月田貝塚の分村として機能したと考えられる。二月田貝塚（別称空墓（からばか）貝塚）は七ヶ浜半島の先端に近い標高 10 ～ 15 ｍの丘陵から低地にかけて立地し、遺跡の範囲は東西 140 ｍ、南北 110 ｍと推定される。アサリを主体とし主鹹貝塚（一部ヤマトシジミ出土）で、貝層は丘陵の斜面に４ヶ所に分かれて馬蹄形に分布する。後期中葉～弥生時代まで連綿と営まれたが、1969・70 年の調査では後期後葉（金剛寺１式）～晩期初頭（大洞Ｂ式）と晩期後葉（大洞Ａ（新）式）の遺物

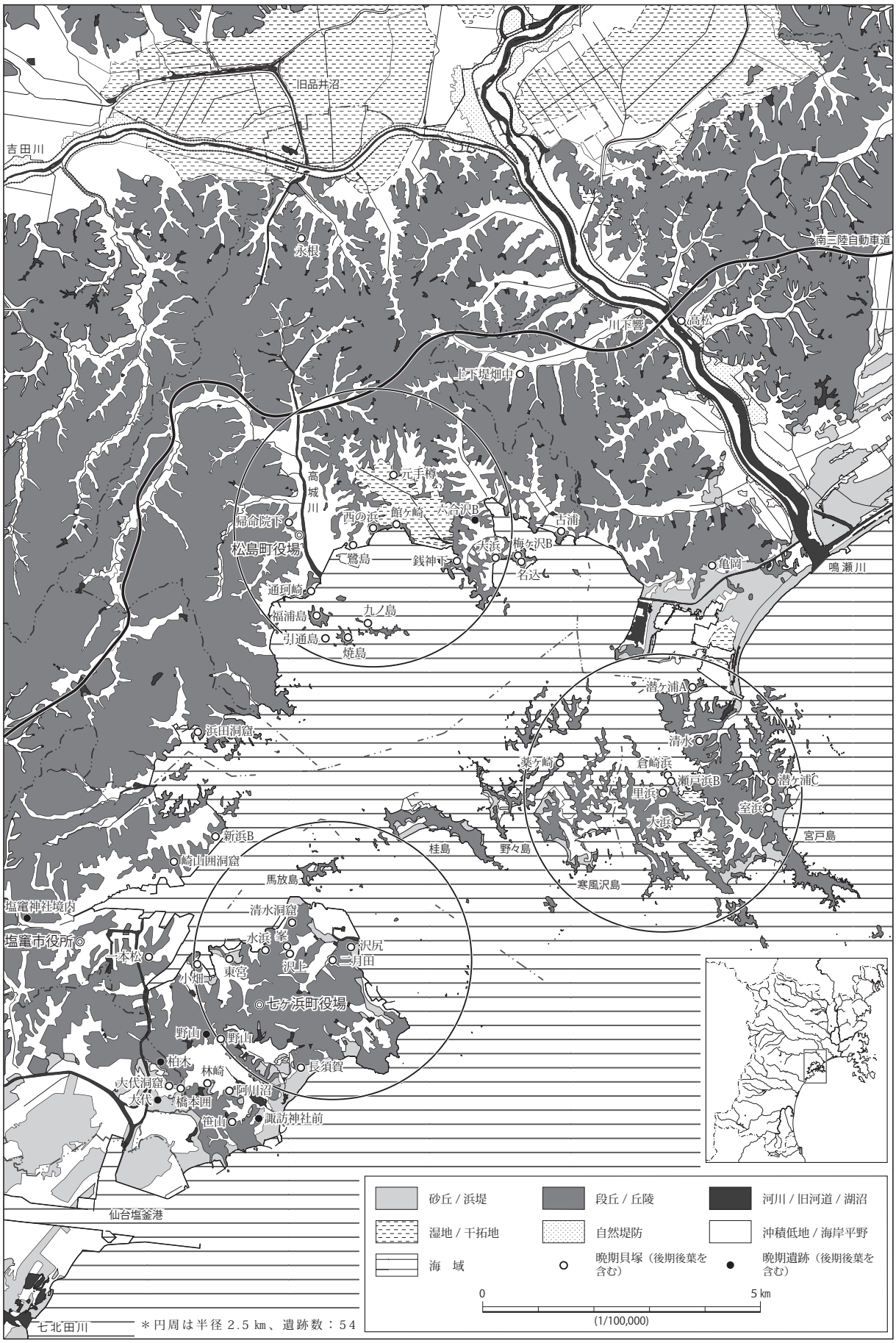


図４　松島湾の地形分類と縄文時代晩期の遺跡分布（1/100,000）

表２　松島湾及びその周辺の縄文時代晩期の遺跡

No.	遺跡名	所在地	立地	時期	後期後葉	大洞B式	大洞BC式	大洞C1式	大洞C2式	大洞A式	大洞A'式	弥生前期	備考
1	二月田貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	後・晩・弥生	○	○	○	○	○	○	○		空墓貝塚/鹹水/製塩遺構・製塩土器/塩竈女子校報告
2	沢尻貝塚	七ヶ浜町	海岸	晩期・弥生						○	○		沢尻囲貝塚/鹹水/二月田貝塚至近
3	沢上貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	晩期	○	○	○	○	○	○			鹹水/大洞B主体/土偶・岩版・貝輪/宮城考古4
4	峯貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	晩期	○				○	○	○		鹹水/製塩土器/沢上貝塚至近
5	清水洞窟貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	晩期・弥生						○	○	○	海蝕洞窟/鹹水/弥生中期主体?/製塩土器//町9集
6	水浜貝塚	七ヶ浜町	海岸	晩期・弥生						○	○		鹹水/製塩土器/町8集
7	東宮貝塚	七ヶ浜町	丘陵麓	後・晩・弥生				○	○	○		○	鳳寿寺貝塚/鹹水/大泉式/製塩土器/石冠
8	小畑貝塚	七ヶ浜町	丘陵	晩期・弥生						○	○		鹹水/製塩土器
9	阿川沼貝塚	七ヶ浜町	海岸	晩期・弥生						○	○		鹹水/製塩土器
10	林崎貝塚	七ヶ浜町	丘陵端部	晩期・弥生					○	○			鹹水/福浦島下層式/大洞C2～A主体/製塩土器/町11集
11	野山貝塚	七ヶ浜町	丘陵斜面	晩期・弥生						○		○	鬼ノ神山貝塚/鹹水/大泉式/製塩遺構・製塩土器/町6集
12	野山遺跡	七ヶ浜町	丘陵斜面	晩期・弥生						○			製塩/製塩土器
13	笹山貝塚	七ヶ浜町	丘陵斜面	晩期・弥生						○	○	○	鹹水/製塩土器/福浦島下層式
14	諏訪神社前遺跡	七ヶ浜町	丘陵麓	晩期					○	○			散布地/製塩土器/町11集
15	長須賀遺跡	七ヶ浜町	浜堤	縄文					○	○			貝塚・製塩/鹹水/製塩土器
16	橋本囲貝塚	多賀城市	丘陵麓	晩期・弥生					○	○			大代貝塚(鵜野囲貝塚を含む)/鹹水/人骨/製塩土器
17	大代洞窟	多賀城市	海蝕崖	縄文						○			海蝕洞窟/鹹水/製塩土器
18	大代遺跡	多賀城市	丘陵麓	晩期		○		○	○	○			散布地/製塩土器
19	柏木遺跡	多賀城市	丘陵斜面	縄文		○							土坑/市36集
20	塩竈神社境内	塩竈市	丘陵斜面	晩期						○			散布地・製塩/製塩土器
21	一本松貝塚	塩竈市	海岸	晩期						○	○		鹹～汽水/製塩
22	崎山囲洞窟	塩竈市	海蝕崖	晩期・弥生						○		○	一匹島洞窟/貝塚/鹹水/福浦島下層/製塩土器/貝層弥生
23	新浜B貝塚	塩竈市	海岸	晩期・弥生			○		○	○		○	鹹水/大泉式/製塩土器・製塩遺構/県113集
24	薬ヶ崎貝塚	塩竈市	海岸	晩期					○				貝塚・製塩/鹹水/製塩土器?/県131集
25	浜田洞窟	利府町	岬	晩期・弥生							○	○	貝塚・製塩/海蝕洞窟/鹹水/大泉式/製塩土器/人骨
26	西の浜貝塚	松島町	丘陵麓	前～晩・弥生	○	○	○	○	○	○	○	○	鹹水/寺下囲式/製塩土器/土偶・角偶・貝輪
27	鷲島貝塚	松島町	丘陵	前・晩・弥生						○	○	○	鹹水/青木畑式/製塩土器/土坑墓
28	帰命院下貝塚	松島町	丘陵麓	晩期									鹹水(カキ)/製塩土器/晩期後半
29	通河崎貝塚	松島町	丘陵	縄文						○			製塩土器/詳細不明
30	福浦島貝塚	松島町	島嶼	前・晩・弥生						○	○	○	福浦島A貝塚/鹹水/青木畑式/製塩土器
31	引通島貝塚	松島町	島嶼	晩期						○	○		鹹水/製塩土器/詳細不明
32	焼島貝塚	松島町	島嶼	中・晩・弥生									焼島A貝塚/鹹水(カキ)/製塩土器/晩期後半?/貝層は古代?
33	九ノ島貝塚	松島町	島嶼	晩期・弥生									九ノ島A貝塚/鹹水(カキ)/製塩土器/晩期後半?/貝層は古代?
34	館ヶ崎貝塚	松島町	沖積平野	晩期・弥生						○	○		貝塚・製塩/鹹水/製塩土器/汀線付近
35	元手樽遺跡	松島町	丘陵麓	晩期									貝塚・製塩/鹹水/製塩土器/晩期後半?/貝層は古代?
36	銭神下貝塚	松島町	丘陵麓	晩期					○				貝塚・製塩/鹹水/製塩土器(平底)/汀線付近
37	大浜貝塚	松島町	沖積平野	縄文									貝塚・製塩/鹹水/製塩土器/晩期後半?/汀線付近
38	名込貝塚	松島町	丘陵麓	晩期					○				貝塚・製塩/鹹水/製塩土器/汀線付近/貝層は古代?
39	梅ヶ沢B貝塚	松島町	海岸	晩期・弥生					○				鹹水(カキ)/製塩土器/汀線付近/晩期製塩炉?
40	六合沢B遺跡	松島町	海岸	晩期									製塩遺跡/晩期後半
41	古浦貝塚	松島町	丘陵麓	晩期	○				○	○			古浦A貝塚/鹹水(カキ・アサリ)/製塩土器(尖底)
42	亀岡貝塚	東松島市	浜堤	晩期						○	○		鹹水/貝層は古墳～古代の可能性
43	潜ヶ浦A貝塚	東松島市	丘陵麓	晩期				○	○	○	○		潜ヶ浦貝塚/鹹水/製塩土器/汀線付近
44	清水貝塚	東松島市	丘陵麓	晩期	○	○							清水囲貝塚/鹹水/完形土器(瘤付)/10m以下に立地
45	潜ヶ浦C貝塚	東松島市	丘陵斜面	晩期					○				鹹水/10m以下に立地/詳細不明
46	室浜貝塚	東松島市	丘陵斜面	前～晩期	○	○							浦口貝塚/鹹水(カキ・アサリ)/前期初頭主体
47	里浜貝塚	東松島市	丘陵麓	前～晩・弥生	○	○	○	○	○	○	○	○	鹹水/福浦島下層・大泉式/製塩遺構・製塩土器
48	倉崎浜貝塚	東松島市	海岸	晩期									貝塚・製塩/鹹水/製塩土器/晩期後半/汀線付近
49	瀬戸浜B貝塚	東松島市	海岸	晩期						○			貝塚・製塩/鹹水/製塩土器(尖底)/汀線付近
50	大浜貝塚	東松島市	丘陵斜面	晩期									貝塚・製塩/鹹水/晩期後半/汀線付近
51	高松貝塚	東松島市	河川敷	早～晩・弥生	○	○							河川改修工事で壊滅
52	川下響貝塚	東松島市	河川敷	前～晩期			○	○	○	○	○		鹹水/人骨(時期不明)/河川改修工事で壊滅
53	上下堤畑中貝塚	東松島市	丘陵麓	前・晩期			○	○	○				獣骨
54	永根貝塚	松島町	丘陵	前～後・弥生	○	○	○	○	○				幡谷貝塚/汽水(オキシジミ・ハマグリ)/土偶・石刀
				型式別遺跡数	10	10	8	10	22	34	19	11	

＊網点は貝塚を示す

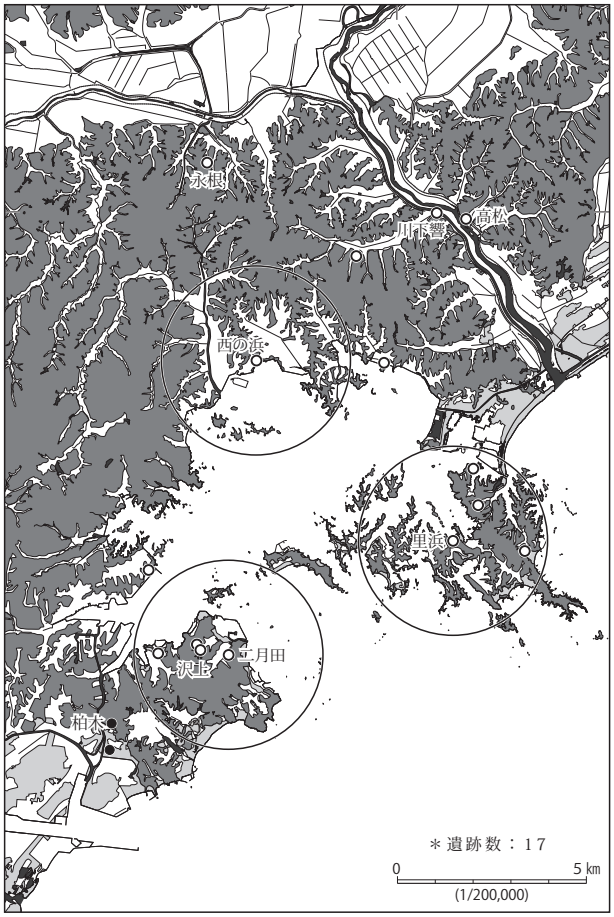


図５　松島湾の縄文晩期前半の遺跡分布

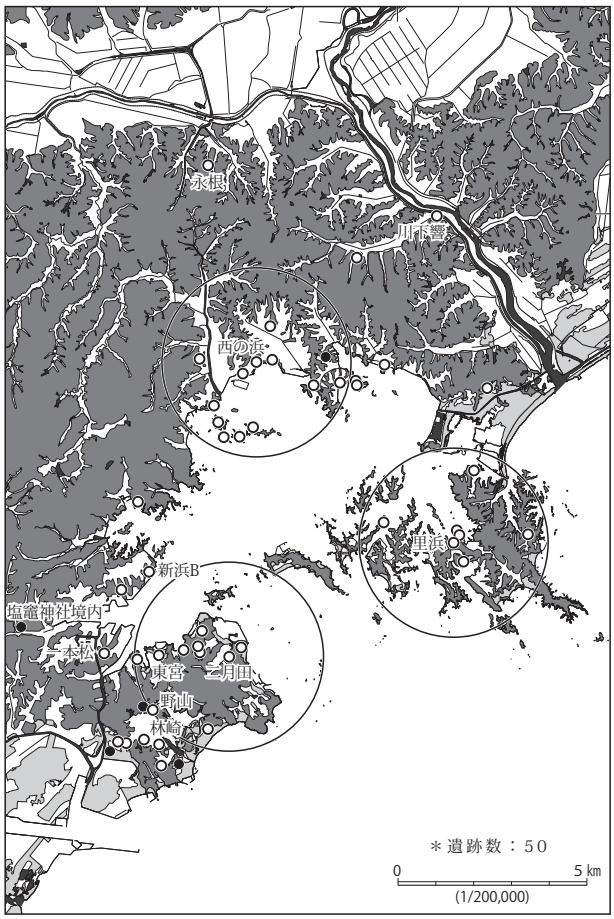


図６　松島湾の縄文晩期後半の遺跡分布

が出土し、その他に製塩土器（図８－ 29 ～ 40）と製塩遺構、住居跡（大洞Ａ（新）式）、埋葬人骨３体が検出された。製塩遺構は径 85 ～ 100 ㎝、深さ 30 ～ 40 ㎝の３基の円形状の土坑で、標高 10 ｍの丘陵緩斜面に構築されていた。基盤の凝灰岩を掘り込んでおり、製塩の際に塩水を貯めておく「潮溜（しおだめ）」と推定され、遺構内部は製塩土器と灰層が互層をなしていた（後藤編 1972）。

（２）年代的推移

図４の晩期遺跡のうち型式が特定されたのは 42 遺跡ある（表２）。型式別では後期後葉が 10 遺跡、大洞Ｂ式が 10 遺跡、大洞 BC 式が８遺跡、大洞 C1 式が 10 遺跡、大洞 C2 式が 22 遺跡、大洞Ａ式が 34 遺跡、大洞 A’式が 19 遺跡、弥生時代前期が 11 遺跡で、大洞 C1 式までの晩期前半が 10 遺跡前後で推移したのに対し、大洞 C2 式が倍増し、大洞Ａ式にピークがある。後述するように晩期後半に土器製塩が開始され、当該域の殆どの遺跡が製塩に関わっていたことから、大洞 C2 式の遺跡数の急増は土器製塩によるものである。大洞Ａ式の遺跡数が突出したのは、同式が尖底の製塩土器に特徴づけられ、特定しやすい点もあるが、専業的な土器製塩が最も活発化したことによるものであろう。

図５には晩期前半（後期後葉～大洞 C1 式）、図６には晩期後半（大洞 C2 式～弥生前期）の遺跡をプロットしたが、型式が特定されていなくとも、製塩土器が認められた遺跡は晩期後半に含めている。晩期前半は三つの拠点貝塚にほぼ限定されるのに対し、晩期後半では拠点貝塚の周囲に小規模な遺跡が多数展開しており、晩期前半と後半では遺跡分布に明確な差異が指摘される。

図７の弥生時代の遺跡は 36 遺跡である。そのうち貝塚は 28 遺跡を数えるが、前期の福浦島下層式、中期の寺下囲式、桝形囲式、崎山囲式の標式遺跡の存することが特筆される。型式毎の正確な遺跡数は算出していないが、弥生前期は 11 遺跡で先行型式の大洞 A’式期（19 遺跡）から減少する。そして中期寺下囲式・桝形囲式期が最大となり、後期は激減する。晩期の三つの支群は弥生時代にも継承され、宮戸島遺跡群は２遺跡、松島遺跡群は９遺跡、七ヶ浜遺跡群は 19 遺跡を数える。しかし拠点の貝塚の規模は縮小し、支群を構成する遺跡数も少

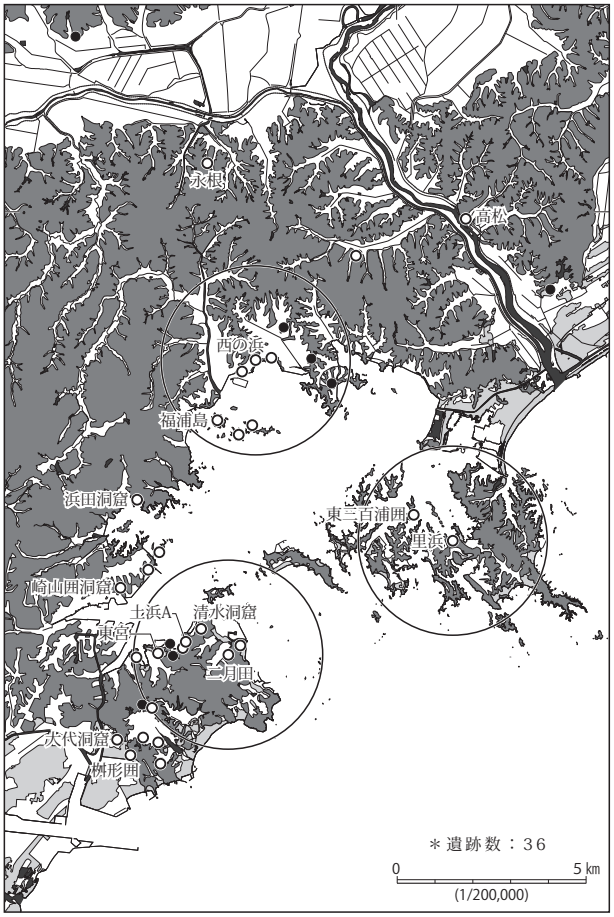


図７　松島湾の弥生時代の遺跡分布

なくなっており、殆どが製塩遺跡となる。製塩遺構は西の浜貝塚で寺下囲式期、里浜貝塚北区（会田 1998）で寺下囲式期、土浜（どばま）貝塚（加藤 1968）で寺下囲式期？、東宮貝塚で大泉式～桝形囲式の製塩炉が指摘されているが、晩期に連絡する弥生前期の製塩遺跡の内容は明らかになっていない。

また当該域には海蝕洞窟が多く存するが、弥生時代にその利用が活発化する。七ヶ浜半島では清水洞窟貝塚（七ヶ浜町）と大代（おおしろ）洞窟（多賀城市）、塩釜港周辺では崎山囲洞窟（塩竈市）と浜田洞窟（利府町）が知られている。いずれも晩期後葉、弥生、古墳、古代と断続的に利用されており、貝塚や製塩土器が伴い、人骨も検出されている。時期が複合するため帰属する年代の特定は困難であるが、居住地、製塩作業場、埋葬地として利用されていたと考えられる。

弥生時代中期になると、近接する仙台平野では農耕社会が根付いて隆盛したのに対し、松島湾では貝塚の数が減少し、規模も小さくなる。その背景には、縄文時代の「網羅的漁撈形態」から、弥生時代の「専業的・選択的な漁撈形態」への転換があったと推定されている（菅原 2005）。「専業的・選択的な漁撈形態」とは、稲作の合間に集約的に行う漁撈活動で、稲作を受容したことで、農繁期と重なる漁撈活動の比重が低下したと理解されている。当該域の弥生遺跡の殆どが晩期後半と同様に土器製塩に従事しており、仙台平野の農耕集落の定着と松島湾の土器製塩の盛行には、何らかの相関性が存したのであろう。しかし土器製塩は、弥生中期後葉に衰退した。

（３）松島湾の製塩遺跡

縄文晩期の松島湾沿岸と湾内の島嶼では、前記したように製塩作業に関連した遺跡が多数確認されている。当該域は丘陵端が海面に突き出した複雑な地形で、丘陵尾根の間の沢地が入り江状となった小さな湾が発達するが、製塩遺跡の多くはこのような幅 100 m以下の小規模な砂層低地に立地する。

松島湾では 1980 年代の初め頃まで、縄文後期後葉に製塩土器が伴うことが指摘されていた（岡村編 1982）。しかし現時点では大洞 C2 式以前で製塩活動を示す積極的な証拠は確認されていない[註5]。これまで縄文晩期の製塩遺構は、里浜貝塚（大洞 C2（新）～A式）、新浜B遺跡（大洞 C2 ～A式）、二月田貝塚（大洞A（新）式）、鬼ノ神山（きのかみやま）（別称野山）貝塚（大洞A（古）式）で検出されたが、前記した三つの拠点貝塚のうち里浜貝塚と二月田貝塚が含まれる。残る西の浜貝塚でも製塩土器が出土し、弥生中期の製塩遺構が検出されたことから、晩期後半にも土器製塩が行われていた公算は大きい。

松島湾沿岸で製塩に関係した遺跡は、図６に示した遺跡のうち、沿岸以外の川下響（じょうげつつみはたけなか）・上下堤畑中・永根貝塚と、宮戸島の潜ヶ浦C貝塚を除いた殆どの遺跡が該当しており、46 遺跡を数える。その内訳は、宮戸島遺跡群で６遺跡、松島遺跡群で 16 遺跡、七ヶ浜遺跡群で 22 遺跡（塩竈市内の４遺跡を含む）で、遺跡群から外れるのは浜田洞窟と亀岡貝塚（東松島市）に過ぎない。

宮戸島遺跡群　宮戸島遺跡群では里浜貝塚を中心にその周辺の標高３m以下の砂層低地に製塩遺跡が営まれ、大洞 C2 式期から弥生中期桝形囲式期まで、地点を移しながら土器製塩が長期間行われていた（詳細は後述）。その他に寒風沢島に面する蛤浜製塩遺跡も、晩期後半の製塩遺跡であった可能性が考えられる。野々島の薬ヶ崎貝塚はカキ・アサリを主体にした小規模な貝塚で、古代の

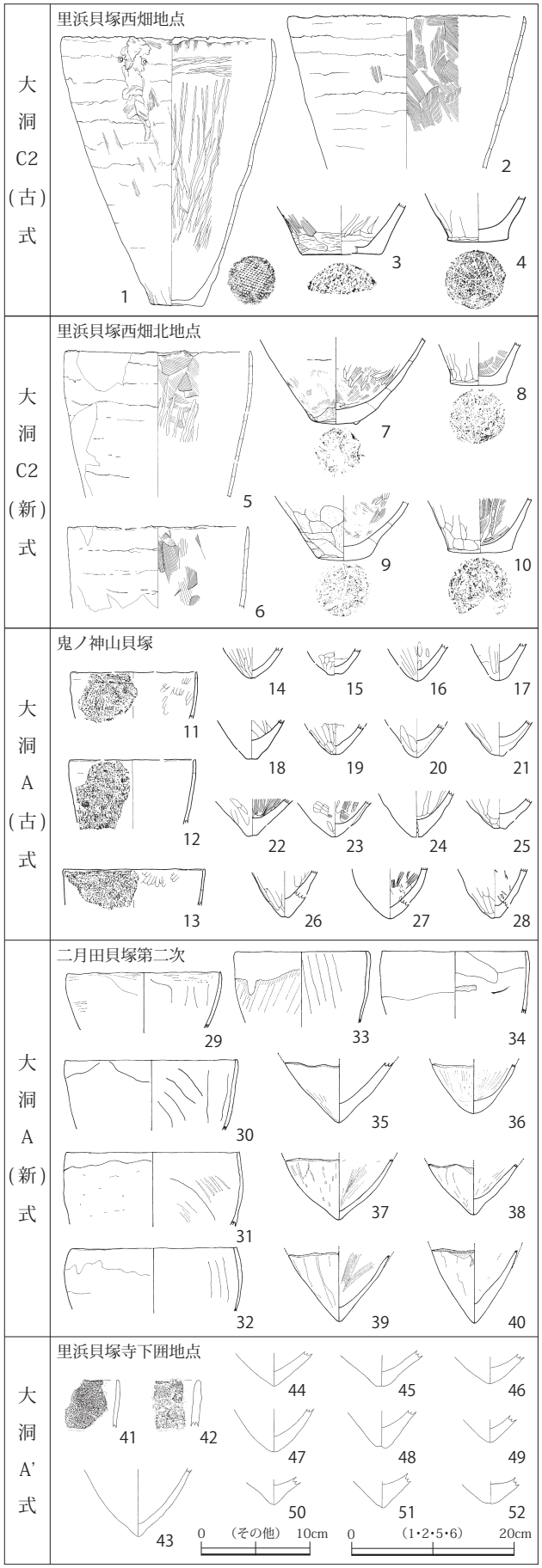


図8　松島湾出土の製塩土器（1）

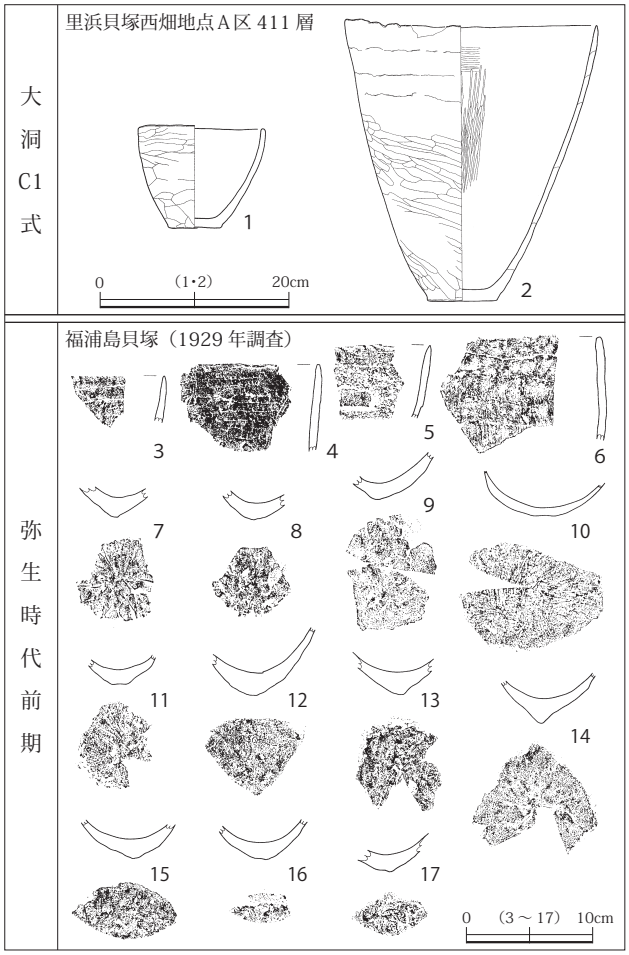


図9　松島湾出土の製塩土器（2）

製塩土器が散布しているが、晩期の製塩活動は明らかでない。

松島遺跡群　松島遺跡群の製塩遺跡は西の浜貝塚の周辺地域、銭神半島周辺、島嶼部の３ヶ所にまとまっている。多くは標高１m前後の入り江状の浜辺に製塩土器が散布した状態で、銭神下貝塚（松島町）では平底の製塩土器、古浦貝塚（松島町）ではカキ・アサリ主体の貝層と多数の製塩土器（尖底・小型平底）、梅ヶ沢Ｂ貝塚（松島町）では焼土・灰・炭化物・製塩土器を含む貝層と炉跡の存在が指摘されている（藤沼ほか 1989）。

七ヶ浜遺跡群　七ヶ浜遺跡群の製塩遺跡は七ヶ浜半島東側、湾内を臨む半島北側、半島南側の古阿川湾周辺、塩釜港周辺の４ヶ所にまとまっている。

半島東側の二月田遺跡では丘陵上で前記した大洞Ａ（新）式の製塩遺構が検出されたが、丘陵南西部斜面の貝層下端にも製塩土器・カキ殻・灰・木炭等をまじえた製塩に関連した事象が確認されている（藤沼ほか 1989）。また二月田貝塚の西方 700 m、浅い谷を挟ん

で対峙した沢上貝塚と峯貝塚では、丘陵先端の麓に製塩土器の散布が見られ、特に後者には尖底が多い。

半島北側では、丘陵斜面の標高４～５ｍの海蝕洞窟である清水洞窟貝塚（田村 2010）や小さな入り江にある水浜遺跡（川村 1992）が調査され、平底と尖底の製塩土器が出土した。標高１ｍ以下の低地に立地する一本松貝塚は、８ｍ×８ｍの小規模な汽水性の貝塚（ヤマトシジミ・アサリ主体）で、貝層から大洞Ａ式土器に伴って準尖底と小径平丸底の製塩土器が出土した（加藤 1960、加藤ほか 1989）。

古阿川湾では、湾奥の鬼ノ神山貝塚（野山貝塚）で、大洞Ａ（古）式の貝層と平地式集石炉 11 基が検出された（鴇田ほか 1982）。製塩土器は尖底が主体であるが、底部がやや鈍角な形態（準尖底）が多く認められる（図８－ 14 ～ 28）。有文土器は大洞Ａ（古）式で占められており、平底から鋭角な尖底への過渡的な様相が窺える。対岸に位置する林崎貝塚では、大洞 C2（新）式～Ａ（古）式主体の遺物包含層 (製塩土器層を主体に貝層、灰層、焼土層、炭化物) から、平丸底と準尖底の製塩土器が多く出土し、土器製塩が行われたことが指摘されている（田村 2016）。

塩釜港周辺では、海蝕洞窟である崎山囲洞窟で大洞Ａ式土器に伴って尖底の製塩土器が多く出土した（加藤 1960）。浜辺にある新浜Ｂ貝塚では大洞 C2 ～Ａ式の製塩炉２基が検出された（藤沼ほか 1986）。

小　結　松島湾沿岸の一帯では、晩期後半の製塩遺跡が濃密に分布しており、三つの拠点貝塚を中心として、その周辺で土器製塩が行われていた。多くは居住地には適さない砂層低地にあり、生活残滓があまり含まれないことから、作業場として集中的に利用され、日常的な生活の拠点は別の場所にあったと推定される。

製塩土器底部の形態は、時間的なまとまりを持った里浜貝塚西畑地点、同西畑北地点、鬼ノ神山貝塚、二月田貝塚の成果から、大径平底（大洞 C2（古）式）→大径平丸底（大洞 C2（新）式）→準尖底（大洞Ａ（古）式）→尖底（大洞Ａ（新）式）の段階的な変遷が指摘されている（鈴木 1992）。無文薄手粗製土器で、大洞 C2 式では器表面の調整痕をとどめず、輪積痕を明瞭に残している（図８－１・２・５・６）。大洞 C2（古）式では大径平底（１・３・４）で、同期の粗製深鉢形土器に類似した形態であるが、同（新）式では底部の厚さが増し、底面が不安定な丸底気味の個体（７～ 10）が増加しており、尖底への過渡的様相が現出する。続く大洞Ａ（古）式では丸底状の鈍角な尖底（14 ～ 28）や小径平丸底が主体となり、同（新）式では鋭角な尖底が特徴となる（35 ～ 40）。大洞Ａ’式は同様の尖底（43 ～ 52）を踏襲するが、弥生前期では底面の丸味が増しており（図９－７～ 17）、弥生中期は尖底・尖底風丸底と大径平底が並存したと推定される。

また大洞 C2 ～Ａ（古）式の製塩炉は、ピット式底型炉→平地式不定型炉→平地式集石炉へと改良が加えられたと指摘されている（鈴木 1992）。この変遷は製塩土器の改良と相関して、製塩作業規模の拡大に対応した状況を示したものと考えられ、弥生中期では焼礫を方形に敷き詰めた平地式集石炉（里浜貝塚）、ピット式不定型炉（東宮貝塚）、ピット式定型炉（西の浜貝塚）等の多様な形態が認められる。

（４）里浜貝塚の 概要

里浜貝塚は石巻湾と松島湾を分ける宮戸島に位置している。同島は湾口北東部の半島状に突き出た島で、南北約 4.3 ㎞、東西約 4.5 ㎞の湾内最大の面積（7.39 ㎢）を有する。島内の最高峰は中央部の標高 104.8 ｍの大高森で、その東側には 50 ｍ以上の高地が点在するのに対し、西側には 40 ｍ以下の低いなだらかな丘陵が樹枝状に延びている。島周辺は元々多島海をなしており、北側は明治期まで潜ヶ浦と呼ばれる海域により対岸と分かたれていたが、鳴瀬川河口から延びた洲崎浜砂嘴によって陸繋島となっている（註６）。

里浜貝塚は、宮戸島西部の里地区を中心とする丘陵（標高 20 ～ 30 ｍ）から低地にかけて分布する貝塚群の総称で、遺跡の範囲は東西 640 ｍ、南北 200 ｍを測り、国内最大規模の貝塚として、1995 年に貝塚のほぼ全域に当たる約 160,000 ㎡が国史跡に指定された。貝塚は西から「台囲地区」（西貝塚）、「里・寺下囲・西畑地区」（北貝塚）、「袖窪・畑中・梨木地区」（東貝塚）に三分され、地点を変えながら縄文前期初頭（上川名Ⅱ式頃）～弥生時代中期（桝形囲式頃）までの貝層が形成されていた（図 10）。アサリ・スガイを主体とした主鹹貝塚で、縄文前期～後期初頭にかけては、東端の「袖窪・畑中・梨木地区」と西端の「台囲地区」に分散した拡がりが見られるが、

図 10　宮城県東松島市里浜貝塚全体図

後期後葉～弥生中期にかけては、西側半分の「里・寺下囲・西畑地区」と「台囲地区」に収斂した経過が指摘される（表３）。従来の知見に拠れば、貝層の厚さは寺下囲地点が最も厚く６mに及ぶところがあり、西畑・風越地点は少なくとも２～３mの層厚を有しており、晩期初頭以降は居住の主体が「台囲地区」（西貝塚）から「里・寺下囲・西畑地区」（北貝塚）に移ったと推定されている（岡村編 1982）。

（５）里浜貝塚の土器製塩

里浜貝塚では製塩遺構が調査され、また製塩土器が多数出土している。角田文衛氏による 1934 年の寺下囲地点の調査（貝塚の南側？）で、大洞 A’ 式の精製土器に伴った尖底の製塩土器が採集されていた（角田 1936）。昭和初期の調査のため当時製塩土器との認識はなかったが、後年の報告（渡辺ほか 2005）では大洞 A’ 式の製塩土器の底部形態が先行型式と同様の尖底であったこと

表３　里浜貝塚各地点の年代的変遷

		西貝塚（台囲地区）			北貝塚（里・寺下囲・西畑地区）				東貝塚（袖窪・畑中・梨木地区）			
		風越地点	台囲頂部地点	台囲東斜面地点	西畑北地点	西畑地点	寺下囲地点	HSO地点	袖窪地点	畑中地点	梨木地点	梨木東地点
前期	前葉 大木1式	○	○		○							◎
	中葉 大木2a・2b式		○									
	後葉 大木3～6式		◎	○?					○			
中期	前葉 大木7a・7b式		◎									
	中葉 大木8a・8b式	◎							◎	◎		
	後葉 大木9・10式	◎							◎	◎	◎	
後期	初頭 門前・袖窪式	◎							◎		◎	
	前葉 南境式	◎							◎		◎	
	中葉 宝ヶ峯式	◎					◎					
	後葉 金剛寺式	◎			◎	◎	◎	◎				
晩期	大洞B式	◎				○	◎	○				
	大洞BC式	○				○	◎	○				
	大洞C1式	○				◎＊	◎	◎				
	大洞C2式	○			◎＊	◎＊	◎	◎				
	大洞A式				○＊	◎＊	◎＊	○				
	大洞A'式				○		◎＊					
弥生時代	前期 福浦島下層式						◎					
	中期前葉 寺下囲式				○＊		◎					
	中期中葉 桝形囲式	○			○	○	◎					
調査年		1952・53・55・56・58・59・91・98年	1986・87年		1984～86・97年	1979～84・96・97年	1918・19・34年	1996年	1962年	1958年	1959・61年	1989・90年
主要文献		資料43・町5他	資料32	資料5	資料22・町3	資料7・町2他	資料25	資料5・町2	仙台湾考古			資料36
主体型式		大木8b～9式瘤付～大洞B	大木7a式	大木3～5式?	大洞C2新式	大洞C2古式	大洞BC式～弥生	瘤付・大洞C2式	南境式	大木9～南境式		大木1式
規模		40m×90m	25m×50m	25m×60m	25m×20m	38m×20m	150m×50m	範囲不明	50m×40m	100m×30m		10m×20m
標高		14～22m	22～28m	20～30m	1～3m	5～10m	10m前後	10m以下	10m前後	10～20m		20m前後
その他		別称台囲貝塚	ｽｶﾞｲ・ｱｻﾘ主標高最上位	詳細不明	製塩作業場東地点含む	製塩土器出土弥生幼児墓	製塩土器出土晩期後半墓域	晩期前半墓域八木氏宅周辺	別称袖窪貝塚埋葬人骨	別称畑中貝塚	別称梨木貝塚	ｽｶﾞｲ主体最初期貝層

◎：貝塚形跡　○：土器出土　＊：製塩遺構・製塩土器

が確認出来る（図８－43～52）。

北部の西畑地点は、標高 10 m以下の入り江状の北斜面に形成された南北 38 m×東西 20 mの貝層の拡がりで、1979～84 年に 6 次にわたる発掘調査（1981 年の第３次調査は古環境調査）が、東北歴史資料館（当時）により実施された。貝塚中央部の３m×９mの僅かな範囲が微細層位発掘と悉皆採集により調査されたが、最も深いところで地表から３mまで掘り下げられ、416 枚の堆積層が確認された。同地点では晩期中葉大洞C2（古）式期を主体とした土器・石器・骨角牙製品・貝製品等が豊富に出土し、海浜集落の実態が明確にされた（岡村ほか 1986・87）。同地点は日常の生活場であったため製塩遺構は検出されなかったが、輪積痕を残した「大径平底」の製塩土器（図８－１～４）がまとまって出土しており、同貝塚で土器製塩の操業が始まった証左として特記される（藤沼ほか 1983）。

西畑北地点は西畑地点の北方約 100 ｍに位置しており、現汀線から 40 ｍ程度離れた標高 3 ｍの低地に立地している。1984 ～ 86 年の 3 次にわたる発掘調査で、 4 ｍ× 12 ｍの狭い範囲から大洞 C2（新）式の製塩炉が 11 基検出され、専業的な土器製塩が行われていた様相が明らかにされた（小井川・加藤 1988）。製塩土器は細片化が著しく、口縁部片で算出された個体数は 510 点で、「大径平丸底」を特徴とする（図８－５～ 10）。製塩炉はピット式定型炉と平地式不定型炉が並存し、 4 期の重複関係と同時最大 4 基による操業が確認され、特殊な「練物」（山土・灰と焼いて砕いた貝殻を海水で練った漆喰のようなもの）を構築材に用いていた。また 1997 年に鳴瀬町教育委員会（当時）が調査した北区（西畑北地点の北東方 5 ｍ）では、大洞Ａ式期の練物を伴った平地式の製塩炉 2 基と弥生中期寺下囲式期の集石炉 1 基が検出された（会田 1998）。

里浜貝塚の周囲（図 10）では、その他にも北に突き出た小さな半島の付け根の砂丘にある瀬戸浜Ｂ貝塚（標高 1 ～ 3 ｍ）で、大洞Ａ式の尖底の製塩土器が採集されている。半島先端の砂丘にある倉崎浜貝塚（標高 1 ～ 3 ｍ）では薄手で小さな平底の製塩土器、また南に面した入り江の砂丘にある大浜貝塚（標高 1 ～ 2 ｍ）でも製塩土器が採集されており、晩期後半の土器製塩の痕跡を各所で確認することが出来る。

大洞 C2 式以降になると里浜貝塚の周囲の標高 1 ～ 3 ｍの砂層低地に製塩遺跡が形成されており、地点を変えながら継続して土器製塩が行われていた様相を窺うことが出来る。寺下囲地点では晩期最終末の大洞 A’ 式期の製塩土器が出土し、弥生時代では北区から中期寺下囲式期の平地式集石炉が検出され、晩期後半から弥生中期にかけて土器製塩が一貫していたと思われるが、弥生前期の様相は判然としない。日常生活の主体が丘陵が延びた北貝塚周辺にあって、作業場として砂層低地が占地されていたのであろう。

4　まとめ

遺跡分布を通して松島湾沿岸における縄文晩期の様相を概観し、地域社会の一端を垣間見てきた。

晩期前半では里浜・西の浜・二月田貝塚を拠点集落として、これ等を中核に生業活動が営まれていた。拠点集落への集住化が徹底しており、周囲に展開した遺跡は少なく、図 4 の円周が示すように個々の集団が排他的に利用した閉じた領域に分割される。その一方で、三つの集落の住民が松島湾の湾内や外洋を舞台に、組織的な協同作業を行っていた可能性が考えられる。林謙作氏はその具体事例として、湾央の西の浜貝塚でかなりの量の外洋性のマグロ類の魚骨が出土したことを根拠に、三つの集落の住民が共同でマグロの追い込み漁を行っていたと推測した（林 1997）。追い込み漁の当否は別として、集落間協業が成り立っていた蓋然性は十分に考えられ、湾内を相互に往来した緊密な関係が基盤となって、等質の安定した地域社会が構築されていたと想定される。

一方晩期後半になると、三つの集落の領域は継承されたものの、遺跡の低地への進出が顕著となって、土器製塩が活発化する。殆どの遺跡が製塩に関連を持っており、松島湾一帯が土器製塩の拠点地域と化したように思われる。隣接する石巻湾にも製塩遺跡は存したが、遺跡数では松島湾が遙かに凌駕しており、住民は湾内の各所で夏季に集中的に製塩作業に従事し、日常の生活の拠点は作業場を離れた場所にあったと推定される。従って遺跡数の増加がそのまま人口の増加を反映したものではなかったであろう。土器製塩の盛行はこの時期に塩に対する需要が高まって、組織化された広域的な協業関係を基盤として、域外に塩が供給されていったと考えられるが、大形魚類捕獲活動の一層の専門化と新たな保存技術との統合化によるもので、塩業として独立的に確立し、独自の生業として発達した性格のものではないとする意見もある（鈴木 1992）。また晩期中葉は海退と海進の転換期となっており、土器製塩の活発化は海水準の変動が影響を与えた可能性も考えられる（註 7）。

松島湾の隣接地を見てみると、北東側の石巻湾では松島湾と類似した状況が観察される。即ち晩期前半では、南境貝塚（石巻市）、沼津貝塚（石巻市）、尾田峯貝塚（女川町）の三つの拠点貝塚が並存する（図 11）。但し松島湾のような三角の位置関係でなく、古稲井湾奥（現在沖積地）の沼津貝塚を中心に 4 ～ 6 ㎞の並列の関係にあり、その中で規模が大きく存続期間の長い沼津貝塚が突出していたと考えられる。晩期後半では南境貝塚と沼津貝塚、旧北上川河口の永巌寺（えいがんじ）貝塚（石巻市）で製塩土器が出土している。また尾田峯貝塚が位置する万石浦（まんごくうら）では、同

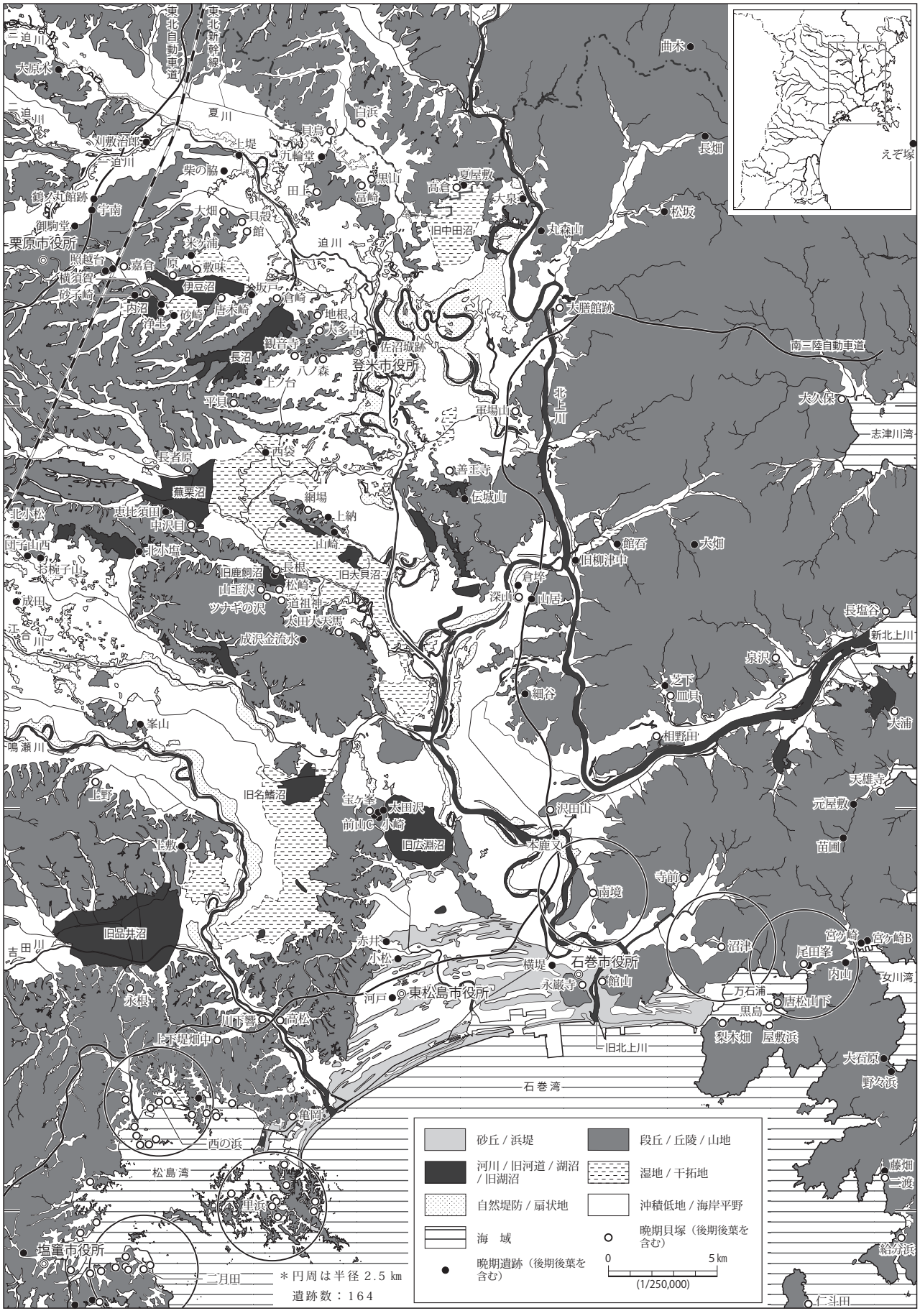


図 11　北上川下流域及びその周辺地域の地形分類と縄文晩期の遺跡分布（1/250,000）

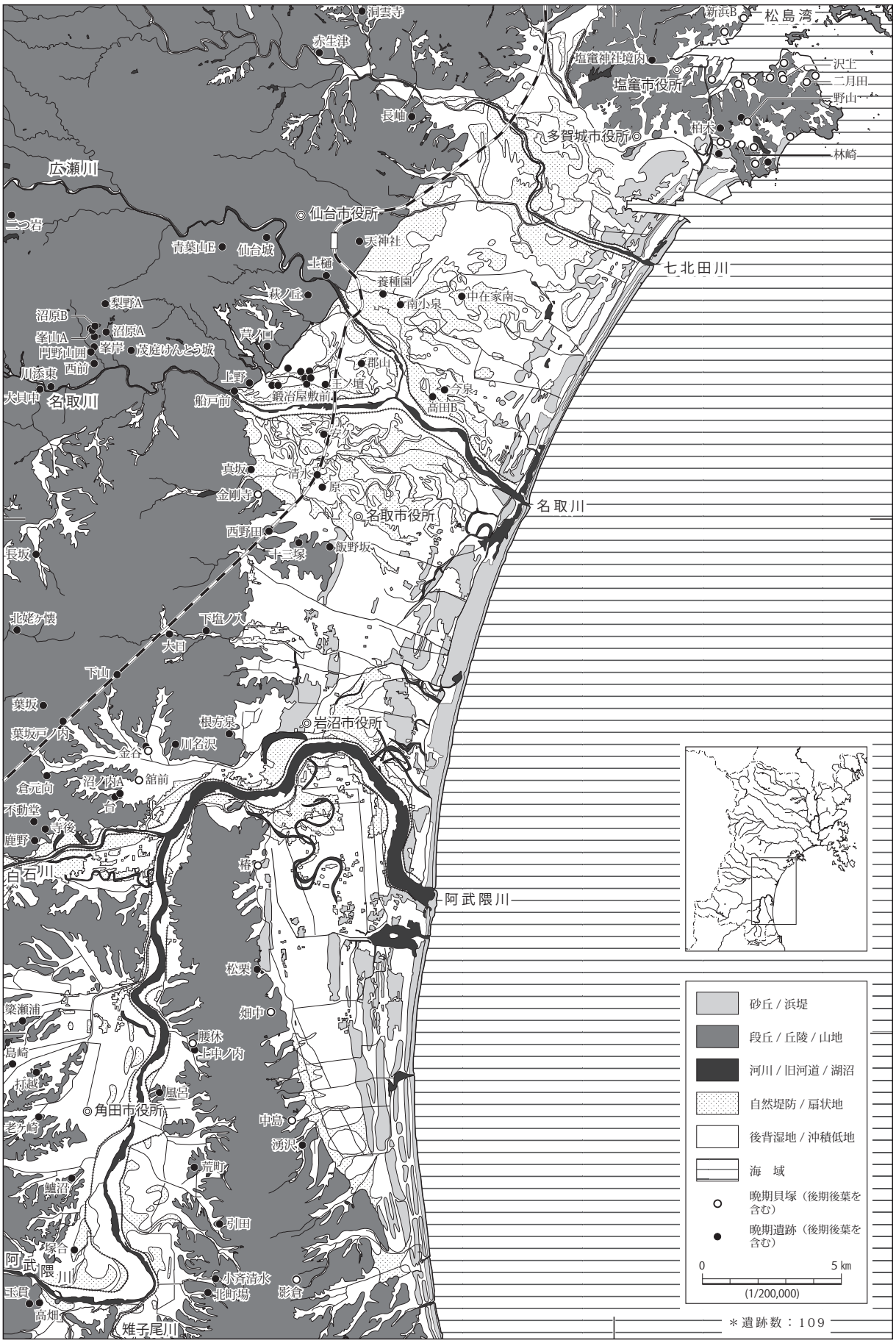


図 12　仙台平野及びその周辺地域の地形分類と縄文晩期の遺跡分布（1/200,000）

貝塚が大洞C1式で途切れたものの、周囲の唐松山下貝塚（女川町）、黒島貝塚（女川町）、屋敷浜貝塚（石巻市）等で製塩土器が採集されており、土器製塩が行われていたことが確認出来る。しかし石巻湾全体の製塩遺跡は6遺跡と少なく、松島湾ほどの活況は認めがたい。

一方南側の仙台湾（狭義）を海域とする仙台平野とその周辺では、松島湾のような大規模且つ長期にわたる晩期の有力遺跡は見当たらない（図12）。特に名取川と広瀬川に挟まれた郡山低地（郡山・王ノ檀遺跡等）と、名取川中流左岸の茂庭丘陵上（梨野A・沼原A・沼原B遺跡等）に遺跡が集中するが、いずれも短期で小規模な遺跡となっている。晩期の主体が海産資源に依存した松島湾沿岸にあって、仙台平野の周辺は内陸産資源を主とした小規模集団の生活領域になっていたと推測される。

以上、松島湾における縄文晩期の地域的特性を検討してきた。松島湾では一定の距離を保ちながら密接な接触を持った三つの集団が並存しており、湾内で集団労働をめぐる何らかの協定が存し、組織化が図られていた可能性を指摘したが、地域社会の理解を深めるには、土器やそれ以外の遺物からの検証が求められる。当該域は土器型式編年研究を先導し、土器資料が豊富に蓄積されている。また燕形銛頭に象徴されるように骨角牙製品が発達し、活発な大形魚類の獲得活動が推定され、貝輪等の装飾品の生産も盛んであった(註8)。今回は製塩土器の底部形態の変化の提示に留まったが、総合的見地からの地域社会の解明がこれからの課題であろう。

旧稿（小林2008）の発表から10年が経過して、宮城県沿岸部の遺跡群を再度検討しました。その間未曾有の大震災を経験しましたが、今回震災後の地形図の観察から海岸線の変貌を目の当たりにし、災害の爪痕の大きさを改めて痛感させられました。被災されました皆様に心からお見舞い申し上げると共に、災害からの一日も早い復興を祈念いたします。

註

1）仙台湾沿岸の貝塚については、図2で松島湾内の沿岸部と島嶼、七ヶ浜半島に位置した貝塚のみをカウントした。従って鳴瀬川に沿った川下響貝塚や高松貝塚等は含んでいない。なお貝塚は『平成28年度（2016年版）宮城県遺跡地名表』で遺跡種別が「貝塚」に区分された遺跡と、『宮城県の貝塚』（藤沼・小井川ほか1989）で縄文時代の可能性が指摘された貝塚を抽出したが、時代が複合した遺跡が多く、貝塚の形成時期が縄文時代に帰属するとは限らない。また貝塚と製塩遺跡の区分が不明瞭であると言わざるを得ない。

2）東日本大震災（2011年）の松島湾内における津波の被害が、外洋部に比べ軽微に済んだ理由として、湾内が浅いため津波の勢いが減じられたことと、点在する島々が緩衝材の役割を果たしたことが上げられている。

3）道珍浜貝塚は高城川西岸の標高10～20mの丘陵麓に位置しているが、正式な発掘調査が実施されないまま、道路工事と小学校敷地の整地でかなりの部分が破壊されたと見られている。遺物包含層を含めた面積は約20,000㎡を測り、大木1・2a・3・4・5・6・7b・8b式土器や土製玦状耳飾の出土が記されている（加藤1960、藤沼ほか1989）。同貝塚の情報が不十分なため、面積以外に拠点集落とする積極的な根拠は見出せない。また西の浜貝塚は中期後葉以降に主体があるが、前期初頭上川名Ⅱ式の貝層も検出されている（後藤2008）。両貝塚には中期に空白期間が存しており、集落が継続的に移行したのか判然としない。

4）（松本1984b）では、海水準－30mが約8,800年前、－20mが約8,500年前、－10mが約7,900年前、－5mが約7,200年前と提示されており、（松本1984a）より100～500年程度古くなっている。また（松本2002）では、－30mが約8,900年前、－20mが約8,700年前、－10mが約8,200年前、－5mが約6,800年前に変更されており、年代が絞り込めず、考古学的年代との対応が困難である。

5）里浜貝塚西畑地点A区の最下部に近い411層（取り上げ層位は615層）は大洞C1式が主体となっており、大径平底の製塩土器（図9－1・2）が出土している。出土層位を重視すると、大洞C1式に土器製塩が開始された可能性が考えられる（小井川ほか2002）。

6）洲崎浜砂州の発達により宮戸島が陸繋島化した時期は、明治期以降の新旧の海図の比較から、1901（明治34）年から1938（昭和13）年の間で、急速に砂嘴地形が発達したと推定されている。当該海域への土砂供給量が急激に増加したことに起因するが、江戸時代初期以降の北上川の河川改修で、北上川本流が石巻湾に流入したことが大きく寄与した可能性が推論されている（八島1998）。

7）鈴木正博氏は関東・東海・近畿地方等の貝塚形成の様相と、較正曲線のリバウンド現象との整合性から、晩期中葉大洞C2式期に寒冷化現象のピークを読み取り、程なく環境の好転に移行し、小規模な海進（荒海海進）が生起したと推定している（鈴木2006）。松島湾では大洞A式期に製塩遺跡のピークがあり、その多くは汀線間際に営まれている。製塩遺跡の盛行が小海進に関連した可能性もあるが、一本松貝塚のように現汀線より低い貝層も認められる。

8）松島湾の後期後葉～晩期初頭の燕形銛頭には、短く二叉に分かれた尾部背面に装飾的な平行沈線や矢羽根状沈線を施したり、尾部側面や腹面に刻み目を加えた特徴が認められる（小林2013）。また同期の拠点貝塚では貝輪製作が盛んに行われていたが、素材の主体が里浜貝塚風越地点はアカガイ・サルボウ製であるのに対し、二月田貝塚はアカガイ製、西の浜貝塚はサルボウ製となっており、遺跡間に差異が見られる（気仙沼湾の田柄貝塚はアカガイ・ベンケイガイ主体）。なお大洞C2式の里浜貝塚西畑地点出土の貝輪はベンケイガイ・イタボガキ製が多く、オオツタノハ製（暖海系）がこれに続く。従前のアカガイ・サルボウ製は少数となっており、海浜環境や嗜好性の変化が指摘される。

引用文献

会田容弘　1998『里浜貝塚　平成9年度発掘調査概報』（鳴瀬町文化財調査報告書第3集）　鳴瀬町教育委員会・奥松島縄文村歴史資料館

会田容弘　2007『松島湾の縄文カレンダー　里浜貝塚』（シリーズ「遺跡を学ぶ」041）　新泉社

岡田康博・永嶋豊ほか　2009 『宮城県室浜貝塚資料・宮城県福浦島貝塚資料・宮城県橋本囲貝塚資料－山内清男考古資料 17－』（奈良文化財研究所史料第 84 冊）　奈良文化財研究所
岡村道雄編　1982 『里浜貝塚Ⅰ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅰ－』（東北歴史資料館集 5）　東北歴史資料館
岡村道雄ほか　1986･87 『里浜貝塚Ⅴ・Ⅵ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅴ・Ⅵ－』（東北歴史資料館資料集 15･19）　東北歴史資料館
加藤　孝　1960 「考古学上により見た塩竈市周辺の遺跡」『塩竈市史Ⅲ　別冊Ⅰ　別刷』 pp.1-80
加藤道男ほか　1989 「仙台湾周辺の製塩遺跡」『東北歴史資料館　研究紀要』第 15 巻　pp.1-44　東北歴史資料館
川村　正　1992 『水浜遺跡』（七ヶ浜町文化財調査報告書第 8 集）　七ヶ浜町教育委員会
後藤勝彦　1968 「宮城県七ヶ浜町吉田浜貝塚〔1〕」『仙台湾周辺の考古学的研究』 pp.1-20　宮城教育大学歴史研究会
後藤勝彦　2008 『西の浜貝塚』（松島町文化財調査報告書第 1 集）　松島町教育委員会
後藤勝彦編　1972 『宮城県七ヶ浜町二月田貝塚（Ⅱ）』 宮城県塩釜女子高等学校社会部
小井川和夫・加藤道男　1988 『里浜貝塚Ⅶ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑北地点の調査－』（東北歴史資料館資料集 22）　東北歴史資料館
小井川和夫･山田晃弘　2002 「里浜貝塚西畑地点出土遺物」『東北歴史博物館研究紀要』 3　pp.45-136　東北歴史博物館
小林圭一　2008 「遺跡分布からみた亀ヶ岡文化期の地域相－宮城県北半･山形盆地･青森平野を例として－」『考古学　Ⅵ』（安斎正人編）　pp.84-118
小林圭一　2013 「東北中部における縄文時代後期後葉の型式変化－田柄貝塚と里浜貝塚の出土層準の再検討－」『研究紀要』 12　pp.45-105　東北芸術工科大学東北文化研究センター
菅原弘樹　2005 「東北地方における弥生時代貝塚と生業」『古代文化』第 57 巻第 5 号（特集 東北弥生文化研究の地平－遺構からみた様相－）　pp.31-42（pp.261-272）　古代学協会
鈴木正博　1992 「土器製塩と貝塚」『季刊考古学』第 41 号（特集 貝塚が語る縄文文化）　pp.47-51　雄山閣
鈴木正博　2006 「「荒海海進」と較正曲線－縄紋式終末における環境（気候）変動と年代推定－」『法政考古』第 32 集　pp.25-55　法政考古学会
田村正樹　2010 『清水洞窟貝塚』（七ヶ浜町文化財調査報告書第 9 集）　七ヶ浜町教育委員会
田村正樹　2016 『七ヶ浜町震災復興事業関連遺跡調査報告 1－平成 24 ～ 26 年度・27 年度 (1)　東日本大震災復興交付金埋蔵文化財発掘調査事業に伴う発掘調査報告書－』（七ヶ浜町文化財調査報告書第 11 集）　七ヶ浜町教育委員会
角田文衛　1936 「陸前里浜貝塚の尖底土器」『史前学雑誌』第 8 巻第 5 号　史前学会（角田文衛　1986 「陸前里浜貝塚の尖底土器」『角田文衛著作集 1　古代学の方法』 pp.391-401　法蔵館）
鴇田勝彦ほか　1982 『鬼ノ神山貝塚・野山遺跡』（七ヶ浜町文化財調査報告書第 6 集）　七ヶ浜町教育委員会
林　謙作　1997 「縄文社会の資源利用・土地利用－「縄文都市論」批判－」『考古学研究』第 44 巻第 3 号　pp.35-51　考古学研究会
藤沼邦彦・岡村道雄ほか　1983 『里浜貝塚Ⅱ－宮城県鳴瀬町宮戸島里浜貝塚西畑地点の調査・研究Ⅱ－』（東北歴史資料館資料集 7）　東北歴史資料館
藤沼邦彦・加藤道男ほか　1986 『塩竈市新浜遺跡－塩釜漁港第 7 次整備計画及び港湾整備特別会計事業関連発掘調査報告－』（宮城県文化財調査報告書第 113 集）　宮城県教育委員会
藤沼邦彦・小井川和夫ほか　1989 『宮城県の貝塚』（東北歴史資料館資料集 25）　東北歴史資料館
松本秀明　1984a 「宮城県松島湾の沈水過程」『東北地理』第 36 巻第 1 号　pp.46-53　東北地理学会
松本秀明　1984b 「沖積平野の形成過程からみた過去一万年間の海岸線変化」『宮城県の研究　第 1 巻　考古学篇』（渡辺信夫編）　pp.7-52　清文堂出版
松本秀明　1988 「宮城県松島湾の沈水過程に関する再検討」『東北地理』第 40 巻第 4 号　pp.290-291　東北地理学会
松本秀明　1999 「第二章　縄文時代　第一節　縄文時代の環境　一　海岸線の地形の変化」『仙台市史　通史編 1　原始』 pp.116-122　仙台市史編さん委員会編
松本秀明　2000 「第 2 章　遺跡の立地と環境　第 1 節　仙台平野の地形環境の変化と高田 B 遺跡」『高田 B 遺跡　第 1 分冊　本文編』（仙台市文化財調査報告書第 242 集）　pp.7-13　仙台市教育委員会
松本秀明　2002 「宮城県松島湾の地形形成過程と過去 2 万年間の海面変化」『奥松島縄文村歴史博物館 10 周年「縄文フェスタ in 奥松島」シンポジウム要旨（2001.10.05）より』〈http://www.ipc.tohoku-gakuin.ac.jp/Hmatsumoto/gakuindai_web/research_kera/tokusyuu/satohamasympo/satohama.htm〉（2017/10/16 アクセス）
松本秀明　2008 「第 1 節　東要害貝塚の地形的位置と完新世後期の地形変化」『東要害貝塚』（大崎市文化財調査報告書第 3 集）　pp.3-6　大崎市教育委員会
八島邦夫　1998 「野蒜洲崎浜の急速な地形の発達とその要因についての一考察」『季刊地理学』50 巻 4 号　pp.329-337　東北地理学会
渡辺誠・吉田泰幸　2005 「宮城県里浜貝塚製塩土器の再発見－角田コレクション紹介 4 －」『名古屋大学博物館報告』第 21 号　pp.1-8　名古屋大学博物館

図版出典

図 1：国土地理院発行（1996 年 3 月）「1:500,000 地方図（3）東北」をベースに作成した。
図 2 ・ 4 ～ 7：国土地理院発行『電子地形図 25000（DVD 版）－宮城県－』（2017 年 8 月 8 日作成）をベースに、国土地理院がインターネット上で公開する「土地条件図」と「治水地形分類図」〈http://maps.gsi.go.jp/〉を参照して作成した。遺跡情報に関しては、宮城県教育委員会の『Web 版遺跡地図「宮城県遺跡地図情報」』・『平成 28 年度（2016 年版）宮城県遺跡地名表』〈https://www.pref.miyagi.jp/site/maizou/bunkazaimap.html〉（2017/11/17 アクセス）と『宮城県の貝塚』（1989 年発行）に基づいている。
図 3：図 2 地形分類図をベースに、（松本 1984：第 9 図）を改変して作成した。
図 8 － 1 ～ 4：（藤沼ほか 1983）、5 ～ 10：（小井川ほか 1988）、11 ～ 28：（鴇田ほか 1982）、29 ～ 40：（後藤編 1972）、41 ～ 52：（渡辺ほか 2005）
図 9 － 1 ・ 2：（小井川ほか 2002）、3 ～ 17：（岡田ほか 2009）
図 10：（会田 2007：図 14）を改変して作成した。
図 11：地質調査総合センターがインターネット上で公開する 5 万分の 1 地質図幅「若柳」・「志津川」・「涌谷」・「登米」・「松島」・「石巻」・「塩竈」・「金華山」〈https://www.gsj.jp/Map/JP/geology4.html〉（2017/3/8 アクセス）をベースに、国土地理院が提供する土地条件図〈http://maps.gsi.go.jp/〉を参照して作成した。
図 12：地質調査総合センターがインターネット上で公開する 5 万分の 1 地質図幅「塩竈」・「仙台」・「岩沼」・「角田」〈https://www.gsj.jp/Map/JP/geology4.html〉（2017/3/8 アクセス）をベースに、国土地理院が提供する土地条件図〈http://maps.gsi.go.jp/〉を参照して作成した。